不定期刊行　　第３６１号　　2010.07.12

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

国立登山研修所「安全登山普及指導者中央研修会」

国立登山研修所（旧文科省登山研修所）の安全登山普及指導者中央研修会が７月８日から１０日までの２泊３日の日程で開催された。昨年度、研修所の組織改編に伴って新たに始まった研修会で、高校山岳部顧問の参加も想定しているものだ。昨年の反省をもとに、今年のこの研修会は１日日程を増やして２泊３日となった。僕は昨年に続いて講師を依頼されたが、自分自身の勉強にもなることなので、共に講師を依頼された大町山の会の榛葉伸男さんと一緒に研修所に向かった。この研修会は、同日程で「読図プランニングコース」と「登攀コース」の二つのコース設定があるが、僕は前者の担当である。僕の班には４名の高校山岳部の顧問の先生が研修生として参加された。日程が一日増えたので、中一日じっくり使え、内容的には昨年度より踏み込んだ研修ができた。「読図」をメインにおきながら、高校山岳部の生徒をフィールドに引き出すための顧問として「安全登山」を行うためのいくつかの条件を洗い直しすることができた。

初日は、最初に地図読みの基礎を確認した上で、翌日の「登山」のプランニングをしたが、これについては、研修参加者が顧問として抱えている悩みなども交流しながら、実際の山に即した対応を事前に検討した。２日目には、前日の計画に沿って研修所付近の里山をフィールドに薮こぎなども経験しながら、地図とコンパスを用いて現在地確認を丹念に行なった。梅雨の中ではあったが、なんとか天気も持ち（僕はやっぱり晴れ男だったか！・・・笑い）、予定した行動をこなせた。

３日目は、もう少し読図を深めたいという研修生の意向に沿って別の山での実習を予定したが、大雨警報が出された状況下であったため、少し予定を組み替えて、雨の勢いが治まるまで研修所内で「ロープワーク」の研修を行うことにした。今回は「初めて入山する山での登山」を想定して、プランニングし、実際に読図を行ったわけだが、現実問題として、我々が高校生を連れて行く場合においても、こういった未知の山域に踏み込む場面は多い。もちろん、現実には登山道を行くことがほとんどではあるが、それにしても自分にとって未知の場所に踏み込むにあたっては、最低パーティとして転ばぬ先の杖として「ロープを携行」するのは当然であると考えたからである。しかし、このことは一般論として了解していても、現実にはどうだろうか？生徒を連れて行くどんな山行の場合にもロープをもっていくということが実践されているとは言い難いのが現状ではないだろうか。その理由として考えられるのは、仮に持っていたとしても、それを有効に活用するための「ギア」の問題と、それを使いこなせる「技術」を身につけていないという点である。確かにロープがあっても使えなくては何の意味もない。

そこで、今回僕は、「ロープワーク」を研修するにあたって、次のことを念頭において研修を組み立てた。高校山岳部の顧問としては、何を持ち、最低どんな技術を身につけるべきか？縦走時にハーネスまで持つことは少ないかもしれない。しかし、一つの案として５０ｍロープとは言わないまでも、団体装備として８ｍｍ２０ｍ、個人装備としてスリング３本（１２０ｃｍ１、６０ｃｍ２）にカラビナ３枚（内１枚は安全環つき）

は常時携行したらどうだろうということを提案し、それらを使ってのロープワークを構築してみた。これだけあれば、なんとかロープをフィックスし生徒を安全に通過させることができるはずである。ただし、当然ながらロープを扱える顧問もしくは生徒が二人いるということが条件である。簡易ハーネスの作り方からセルフビレー、ルート開拓とフィックス工作、ビレー、フィックスの通過、回収まで一通り所内で行った。

雨は結局小ぶりにはならなかったが、それでもせっかく来たからということで、警報が解除されたのを待ってフィールドに出た。前日のプランニングに沿ってルートを選び、読図のおさらいをしながら研修を深めた。途中の沢を渡る地点で増水して渡れないという想定をして実際にロープを出し、そこを通過することを実践的にやってみた。雨中の行動ではあったが、参加された皆さんは熱心に研修されており頭が下がった。帰りがけには生徒が足を滑らせ捻挫を下という想定下での、松葉杖の作り方なども説明し、研修所に帰って最後の時間を使って背負い搬送も体験した。

この研修会は年に２回計画されており、今年度の２回目は１１月６日から８日にかけて行なわれる。是非長野からもどなたかに参加していただければ、と思う。参加された各県の方に聞いてみると、「高校山岳部顧問向けの研修所主催の研修会」への参加については、山形県や栃木県では毎年県で予算化されており、高体連で順番を決め参加できる体制を整えているということだった。長野でもそういったことができないだろうか？顧問の技術力アップは喫緊の課題であるというのが杞憂ならいいのだが・・・。

2010夏「中信地区安全登山研究会」

７月６日、恒例の「安全登山研究会」が開催され、学校登山、各校山岳部の夏山計画のついての検討を行なった。学校登山実施校は、「白馬」「大町」「大町北」の３校。白馬は昨年度中止になった関係で、１、２年の学年登山、大町は例年通り全校登山、大町北は希望者による登山と３校の形態は異なるが、後立山を中心に１泊もしくは２泊での複数コースで実施。かつては県内あちこちで行なわれていた学校登山も今や実施しているのは、大北の３校のみ（だと思う）。以前も書いたが、このご時世こういった行事は一度途絶えると復活は難しい。現に池工でも数年前までは行なわれていたはずだが、今年赴任してみると「学校登山」の「が」の字もない。白馬は山案内人を、大町はＯＢの協力を仰ぎながらのそれとなる。天候に恵まれていい登山になることを願っている。

各校山岳部の登山については、どの学校も今年は北アルプスでの登山を予定しているとのことだった。例年より残雪が多いので、お互いに情報を交換しながら、注意して登ろうということが確認された。

最後に、ここ何年か秋に行っている「登山技術研修交流会」は、今年の県大会でのレスキュー経験なども参考にしながら１０月２２日、２３日に大町市の山岳総合センターと白沢天狗山を使って、読図やロープワーク、搬送などを行なうことが決まった。生徒も含む多くの方の積極的な参加に期待をしたい。

編集子のひとりごと

月末に出発する「偵察」に向けて、高所順応のため１０日、１１日と富士山に登ってきた。お鉢の中で風を避けたにもかかわらず、一晩中吹き荒れた山頂の風は強烈でテントのポールは曲がってしまった。富士はやはり侮れないと思ったことだ。（大西　記）